

書評：「海はどうしてできたのか」

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 和田, 秀樹 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/00024612">https://doi.org/10.14945/00024612</a>

## 書 評

「海はどうしてできたのか」

藤岡換太郎著

講談社ブルーバックス, 820 円 + 税, ISBN978-4062578042



著者の藤岡さんは、ブルーバックのシリーズに、「山はどうしてできるのか」という題の著書を上梓し、その延長の一冊であり、さらに、「川はどうしてできるのか」をほぼ仕上げていると聞く。

藤岡さんは、日本の誇る海洋調査に活躍してきた「しんかい 6500」に 51 潜航、それ以前に「しんかい 2000」をあわせて 59 回の潜航を成し遂げ、潜水艇のパイロットを除けば日本で最もたくさんの深海の様子を見てきました。海がどうしてできたかと、過去形で表現されている意味は、一度できた海は地球の歴史において化学成分などの変化はあろうとも、常にそこにあったと考えられてきたことによると思われる。しかし、この本は、地球の海が消えた、消える可能性のあることを紹介する。火星探査衛星バイキングなど、比較惑星学の新しい視点が加わり、火星に洪水のあった証拠が知られるようになった。遠い先ではあるが、未来地球の進化に新たな視点を加えなければならないことを教えてくれる。

考えてみれば、地球の歴史を知る上で、特に化石など生き物の歴史を調べるときには、ほとんどが海の生き物のことで、まさに海の歴史と重なっている。生命の始まりも海に求められであろうと考えられ、地球の歴史の中核であり、この本も最新の地球史概観である。構成は、原始の海、海の事件史、海水の進化、海のゆくえの 4 部からなり、海の変遷を 1 年に見立てた時間を追った展開をしている。

海水の歴史的变化を追っていく上で、プレカンブリア紀と呼ばれる長い 46 億年のうちの初期 40 億年の歴史に、最近大きな事件簿が書き加えられるようになり、闇の時間が明るく見えてきていることがこの本でよくわかる。海水の成分などの変化を、温かい鍋料理に見立てどのような具が入り出しているかといった展開をしているが、著者がなべ好きでみんなでわいわいとごった煮を囲む姿が重なっている。

地球史概観というかつては安定大陸の知識とプレート理論に則った読み物は、この本にいたって、メイドインジャパンブランドがかしこに見ることができる。古い大陸の記録から明らかになってきた事件簿は、全地球凍結や生命の繁栄、生物絶滅など地球史の大変動が、全マントルを揺るがすスーパーブルームと、それと比べてみると穏やかなプレート運動の織りなすドラマを作った背景となり、日本人の頭脳が全開して海水のマントル逆流にまで到達してきた。かつての日本人が世界の地層をなかなか調べることができなかった時代から、いまや世界中に足を運び、プレカンブリア紀の地層を調査研究

することができるようになり、日本の調査グループが地球史を書き変えている。この本では、その一つに、海水がプレートとともにマントルに吸い込まれていき海が消えていくシナリオが紹介されている。かつて夢想だにしなかったこのシナリオは本当であろうか？

我々は、海に囲まれている世界にいるが、太平洋の海底地形の多様な変化などなかなか考えることはない。今まで、海底地形の変化をつぶさに観察してきた著者は、我々に海底地形の変化の多様性に目を向けさせてくれる。大陸地形の変化は、ヒマラヤにしてもアルプスにしても様々な写真からもその変化の多様性をうかがい知ることができる。1960年代からのグローマーチャレンジャー号以来、随分と海底掘削をしたかと思われるが、浜名湖の湖底に針を刺している程であろうか、ほんとうに浅い点の情報しかない。太平洋やインド洋などの巨大な海底の高まりの地形についても、3,000 km 近くもあるマントルの底から湧き上がる長大なプルームが起源という。そして、この本は、まさに地球時間の未知の世界がまだまだ潜んでいることをうかがわせる。海洋深層水が北極海で作られ、2,000年もかけて日本近海太平洋の底に達する深層水大循環が知られたのはほんの最近である。

最終章で述べられている海のなくなる日は、地球の時間を我々の通常の時間感覚を超えた、ダイナミックな地球の進化の未来像までを見せてくれる。宇宙船地球号と言われて久しく、地球号は依然、地球環境をないがしろにしたまま走り続けている。悠久の海で領土と資源問題でギクシャクする人間社会の軋轢に、包容力のある地球人としての解決施策を考える視点をとれないものかと思う。

沢山の写真が掲載されているが、時に実際の大きさを知るためのスケールがあるとありがたかった。

和田秀樹（静岡大学理学部・地球科学教室）